文化財情報資料部　2－(4)－②－1)

平成30年版『日本美術年鑑』刊行事業・出版事業『美術研究』(シ07)

『日本美術年鑑』

日本美術年鑑は、我が国の各年の美術活動と美術研究・批評の状況を記録した刊行物である。文化財情報資料部では当研究所の前身である帝国美術院附属美術研究所が1936（昭和11）年から始めた『日本美術年鑑』の編集を引き継ぎ、刊行を継続してきた。平成30年版は、B5判、459ページとなった。出版に際し、東京美術商協同組合、株式会社東京美術倶楽部より助成を受けた。

『美術研究』

1932（昭和7）年1月、当研究所の前身である帝国美術院附属美術研究所の初代所長・矢代幸雄の提唱により第1号を刊行。以来、80年以上にわたり、日本・東洋の古美術ならびに日本の近代・現代美術とこれらに関する西洋美術についての論説、研究ノート、書評、展覧会評、研究資料・図版解説等を掲載している。令和元年度は428号、429号、430号を刊行した。出版に際して、東京美術商協同組合、株式会社東京美術倶楽部より助成を受けた。

無形文化遺産部　2－(4)－②－1)

無形文化遺産部出版関係事業(ム04)

『無形文化遺産研究報告』

無形文化財や無形民俗文化財、文化財保存技術に関する研究論文、調査報告、資料紹介等を掲載している。

『無形民俗文化財研究協議会報告書』

無形文化遺産部では毎年テーマを定め、保存会関係者・行政担当者・研究者などが一堂に会して無形の民俗文化財の保護と継承について研究協議する会を開催している。第14回にあたる令和元年度は「無形文化遺産の新たな活用を求めて」をテーマとして開催し、その報告・総合討議の内容などをまとめて報告書として刊行した。

保存科学研究センター　2－(4)－②－1)

『保存科学』第59号の出版(ホ07)

『保存科学』第59号

佐野千絵、稲葉政満（東京藝術大学大学院美術研究科教授）、間渕創（文化財活用センター保存担当研究員）、友田正彦、早川泰弘の5名からなる編集委員会を編成、投稿された13件全ての原稿に対して、査読委員による査読を実施、報文3件、報告7件、資料1件、計11件の掲載を決定した。

https://www.tobunken.go.jp/~ccr/pdf/59/MOKUZI59.html

『東京文化財研究所概要』、『TOBUNKENNEWS』

『東京文化財研究所概要』は研究所の組織や活動内容を、写真を多用して日英2ヶ国語により簡潔に紹介している。令和元年度の概要はA4判37ページ。

『TOBUNKENNEWS』はウェブサイトに公開した毎月の「活動報告」から、紙媒体に適した記事を精選し、文化財保存に関するコラム、刊行物紹介等とともに掲載している。A4判。令和元年度はNo.70（7月刊、52ページ）、71（11月刊、48ページ）、72（2020年3月刊、36ページ）を刊行した。

『東京文化財研究所概要』、『TOBUNKENNEWS』はそれぞれ、各部・センターからの部会員で構成される東京文化財研究所広報委員会の概要部会、ニュース部会が作成し、編集事務はいずれも研究支援推進部企画渉外係が担当している。

プロジェクトの一環として刊行された刊行物

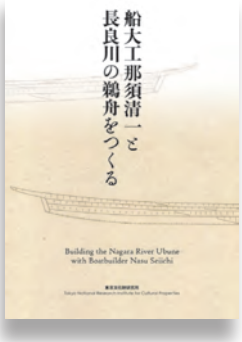
『宮内庁三の丸尚蔵館所蔵　春日権現験記絵　巻七・巻八　光学調査報告書』

東京文化財研究所が宮内庁三の丸尚蔵館と共同で2003（平成15）年から実施してきた、鎌倉時代を代表する絵巻物「春日権現験記絵」全20巻のうち、巻七・巻八を対象とした光学調査報告書である。高精細画像と蛍光X線分析による彩色材料調査結果を併せて収録した。2020年2月刊行、207ページ（縦組）＋XFR79ページ（横組）。
（④シ05の一環として実施）

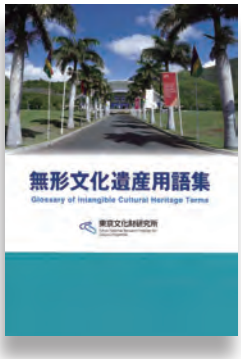
パンフレット『日本の芸能を支える技』V　調べ緒：山下雄治

2017（平成29）年より継続的に行っている、楽器を中心とした文化財保存技術の調査と並行して、楽器製作者とその技術に焦点を当てたパンフレットを順次刊行している。2020年2月刊行、8ページ。
（①ム01の一環として実施）

『船大工那須清一と長良川の鵜舟をつくる』



2017（平成29）年に岐阜県立森林文化アカデミーと共同で行った「鵜舟プロジェクト」の報告書である。アメリカ人船大工ダグラス・ブルックス氏らとともに長良川鵜飼に用いる鵜舟の造船技術の記録を作成し、船大工道具一覧とともに報告書にまとめた。2020年3月刊行、132ページ。
（①ム02の一環として実施）



『無形文化遺産用語集』

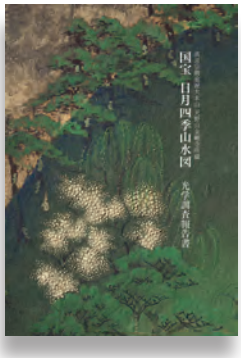
ユネスコ無形文化遺産保護条約に関連した用語について、英語とその和訳、定義をまとめた用語集。近年の政府間委員会における決議や議論、関連事項についての解説も付している。同条約の用語には独特な語法のものも多いため、この用語集が同条約の理解の一助となれば幸いである。日本語、2020年3月刊行、125ページ。

（②ム05の一環として実施）

『国宝日月四季山水図　光学調査報告書』

真言宗御室派大本山 天野山金剛寺が所蔵する「日月四季山水図」は、2018（平成30）年に国宝に指定された六曲一双屏風である。光学調査により、他の日本絵画でほとんど類例のない白色顔料の利用形態が見出された。本報告書では、その調査結果を詳細に公開するために、カラー・近赤外・蛍光写真及び蛍光エックス線分析結果を収録した。2019年10月刊行、128ページ。

（②ホ03の一環として実施）



『文化財修復の現状と諸問題に関する研究会報告書』

近年、文化財に対する注目が増しており、活用も積極的に推進されているが、それに伴い、修復対象とされる文化財も増加している。その中で、従来の修復方法や修復に対する概念では対応できなくなってきている事例が多くなってきている。

このような現状を踏まえ、2018（平成30）年11月22日に、「文化財修復の現状と諸問題に関する研究会」を開催し、現在の修復の概況に関して共有した上で、修復の際に認識される問題点を文化財各分野の専門の先生方からご紹介いただいた。

2020年3月刊行、137ページ。

（②ホ05の一環として実施）

『未来につなぐ人類の技19―コンクリート造構造物の保存と修復』

本書は、近代文化遺産研究室が令和元年度に実施した「コンクリート造構造物の保存と修復に関する研究」の成果を取りまとめた報告書である。文化財所有者・修復技術者等が、保存と修復の実務で利用することを念頭において、国内の学識経験者と行政担当者の論考を加え、同室が実施した事例調査の分析結果をまとめた事例集を収めている。2020年2月刊行、125ページ。

（②ホ06の一環として実施）

『国際シンポジウム
「台湾における近代文化遺産活用の最前線」』

本書は平成30年度に実施した国際シンポジウム「台湾における近代文化遺産活用の最前線」において、国内及び台湾から招聘した近代文化遺産保護の関係者や学識者による近代文化遺産保護と活用に関する講演及び総合討議の内容をまとめたもの。

2020年3月刊行、146ページ。

（②ホ06の一環として実施）

『世界遺産研究協議会「遺産影響評価とは何か」』

本冊子は、2019（令和元）年9月20日に開催された『世界遺産研究協議会「遺産影響評価とは何か」』の講演内容を書き起こしたものである。巻末に講演内容に関連した世界遺産関連用語を掲載している。日本語、2020年3月刊行、127ページ。
（コ01の一環として実施）

『アルメニアにおける染織文化遺産保存修復ワークショップ 2017-2019事業報告』

2017（平成29）～2019（令和元）年にアルメニア共和国において実施した、染織文化遺産保存修復の技術移転・人材育成ワークショップに関する事業報告書。東京文化財研究所が2011（平成23）年より実施してきた同国との協力事業を含めたこれまでの経緯、事業概要、ワークショップの内容を収録。日本語とアルメニア語による本文、巻頭に英語要約文を掲載、2019年12月刊行、34ページ。
（コ02の一環として実施）

『アジア諸国等文化遺産保存修復協力 令和元年度成果報告書』

令和元年度に運営費交付金事業「アジア諸国等文化遺産保存修復協力」として実施した、カンボジア、アルメニア、イランの各国を対象とした調査研究及び研修ならびに主催研究会の概要と事業成果、関連資料等を収録。日本語、2020年3月刊行、53ページ。
（コ02の一環として実施）

『大陸部東南アジアにおける木造建築技術の発達と相互関係』

2018（平成30）年12月に東京文化財研究所において開催した研究会の議事録。現存する木造建築遺構から読み取れる技術的な特徴や、その発展過程における域内相互、さらには域外との関係性をテーマに、カンボジア、タイ、ミャンマーの三か国に焦点を当てて行った報告及び討議の内容を収録。日本語・英語併記、2020年3月刊行、91ページ。
（コ02の一環として実施）

『Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor –Progress Report 2019-』

2019（令和元）年に東京文化財研究所がアンコール・シエムリアプ地域保存整備機構（APSARA）と共同で実施した、カンボジアのタネイ寺院遺跡における保存整備事業に関する報告書。同遺跡東門の修復における事前準備、石材整理、解体、考古発掘、三次元計測、地質試験など諸調査の内容を収録。英語、2020年3月刊行、94ページ、APSARAと連名による刊行。
（コ02の一環として実施）